

令和8年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

武蔵御嶽神社瑞垣内 齋藤義彦歌碑

武蔵御嶽神社の御本殿周囲の神域は、「玉垣内」^{たまがき}、あるいは「瑞垣内」^{みずがき}と呼ばれています。瑞垣内には和歌等が刻まれた石碑がいくつかあります。この中で御本殿から南西の方角にあたる石垣の上に「御嶽菅笠」^{みたけすげかさ}の作者として知られる齋藤義彦が詠んだ歌碑があります(明治14(1881)年8月建立)。

[表面]

齋藤義彦

波不虫能穢越 者羅布 無左之野乃 大麻止山乃 安良金乃都知
(はふ虫の穢を はらふ 武蔵野の 大麻止山の あら金の土)

詠人尔代川天
(詠み人に代って)

権少教正林甕臣書



[意訳]

人間や農作物への昆虫による被害を取り除いてくれるという。この武蔵国の御岳山の不思議な土は。

[語意]

昆虫乃災 延喜式祝詞(905年編纂開始)の六月晦大祓にある。祓の対象。

はらふ 祓ふ。罪穢を去り災危を除く行為。
大麻止山 ここでは御岳山の別名として詠まれた。

あら金 土や砂にかかる枕詞。精錬されていない金属の意。

林甕臣 国学者。平田篤胤没後門人。

齋藤義彦は天明5（1785）年に秩父郡大野原村（秩父市大字大野原）の荒船吉兵衛の長男として生まれました。幼時より学問を好み、秩父神社に社使として勤仕しながら、秩父神社の神職藺田筑前より神道を学んでいます。京都にて近衛家に6年間仕えた後、故郷に帰り、秩父郡長留村（秩父郡小鹿野町長留）の諏訪神社の神職齋藤氏の養嗣子（藤原能兼の養子）となり、同神社に奉仕しました。のちに江戸に出て、幕府神道方の吉川家に仕えました。神道方は寺社奉行の配下にあって、神書を修め、神祇についての故実、祭祀儀礼の調査等を掌る家でした。この吉川家で学生（門弟）から学頭へと進みます。

江戸時代中期に起こる国学は、神道を学ぶ者に和歌へと目を向けさせました。齋藤義彦も例外ではありませんでした。著作の中に幾つかの歌集があり、多くの和歌を詠みました。御岳山に関するものとして、「文政五年五月十七日みたけ山をよめる歌並びに短歌」があります。御岳山を訪ねた時期が解る資料であり、御岳山および周辺地域の地形・由緒等を五七調に詠み込んだ所に、学識の深さ、技巧の巧みさを見る事ができます。江戸日本橋から御岳山までの道中記である「御嶽菅笠」（天保6（1835）年）も七五調で記されていて、長歌のようでもあります。

齋藤義彦は一時蟄居を命ぜられ不遇な時期もありましたが、精力的に活動し、天保4（1833）年御岳山に籠もり、食事を断ち、瀧に打たれ、吉川家の隆盛を取り戻す事を祈念しています。天保6（1835）年には、ある諸侯に召され万葉集歌について講義をしつつ、「御嶽菅笠」、「大祓詞略解^{おおはらえことばりやくげ}」等の著述を記しました。これらの活動と神道に関する専門的な知識が高く評価され、天保11（1840）年に神祇伯白川家より学師に任じられています（「白川家門人帳」正純王による任命の記録）。吉田神道に対抗して江戸に役所を設けた白川家は、関東地方での支持者獲得を狙い有力な学者を引き入れようとしていました。同時期に白川家から学師に任じられた人物に平田篤胤がいることを考えると、齋藤義彦への評価および期待の高さがうかがわれます。

白川家の学師に任じられ活躍が期待されましたが、同年に重病を患い、翌天保12（1841）年門人である根岸喜平太珍政宅にて57歳で没しました。墓所は齋藤家ゆかりの地である秩父郡小鹿野町大字長留にあります。

著書 「臥竜山宮伝記」（文政8（1825）年）、「天仁遠波歌」、「神路初山」、「六根祓一毛抄」、「中臣祓一毛抄」、「年中行事或問」、「三術神書」、「見速計算法」、「大祓詞略解」（天保7（1836）年）、「玉鉾道伝」、「今物語国顕言」、「三禊舎歌集」、「神拝小言」、「武蔵四十四座延喜式内道法名付」、「御嶽菅笠」（天保6（1835）年）、「義彦歌集」（文政年間）、「祝詞笹塚集」（文政4（1821）年）、「御嶽山籠記」、「称辞雑集」、「葬祭儀」（文化10（1813）年）、「武蔵国一宮氷川神社碑銘」（天保6（1835）年）、「城山稻荷縁起」、「關東八箇國延喜式内一百三十座絵圖」、「古事地神代系図天津日嗣」、「詠草集」

（文責 黒田 耕）